

〈研究ノート〉

対抗文化としてのラティーノ壁画が はらむ矛盾

——サンフランシスコ市ミッション地区の ジェントリフィケーション (gentrification) における一考察——

飯 島 力

I はじめに

ラティーノ (Latina/os)¹⁾ が描く壁画の研究は、主にチカーノ研究でなされながら、都市学や美術史など様々な分野でおこなわれてきた (牛島 2001; 加藤 1993; 2002; 多木 1989; Cockcroft and Barmet-Sanchez 1993; Jackson 2009)。それらの研究の多くは 1960 年代のチカーノ運動 (the Chicano Movement)²⁾ から誕生した壁画を対象とし、主流社会から疎外されるラティーノによる「解放のための芸術」(加藤 1993: 160) として壁画を評価してきた。また、本稿で対象となるサンフランシスコ市ミッション地区の壁画に関しては地域に根ざした壁画の歴史や、コミュニティの繁栄に寄与する壁画制作の NPO の役割などが検討されてきた (Cordova 2017; Jacoby 2009; Rodriguez 2011)。総じて、これまでの研究では自らの歴史や文化を自己決定的に表現する対抗文化として、壁画という芸術を捉えていることがうかがえる。

対抗文化としてのラティーノ壁画は、ジェントリフィケーションに直面するミッション地区においても確認できる。ジェントリフィケーションとは、地価高騰などの要因によって労働者階級地区が中産階級化する現象を指し (スミス 2014; 藤塚 2017)、有色人種の労働者階級地区が白人の中産階級地

区に変容するといった構図でしばしば語られる³⁾。歴史的に、ラティーノが集住してきたミッション地区では、この現象がラティーノ人口の減少を招いたため、地域におけるラティーノの歴史や文化が喪失することが危惧されている。そのためか近年のミッション地区では、この現象に対抗するように、ラティーノの視点に立脚した地域の歴史や文化をテーマとした壁画が制作されている。

しかしながら、ジェントリフィケーションに対抗する目的で描かれたはずのラティーノ壁画は、その芸術がもつ魅力のゆえに、白人の流入を促進する芸術として機能する可能性がある。つまり、ジェントリフィケーションに対抗するためのラティーノ壁画は同時に、新たな白人住民を引き寄せるという矛盾を抱えているのである。

本稿では、2016年8月から2017年1月の現地調査で得られた資料を中心に活用し、ミッション地区のラティーノ壁画が白人住民の流入を促進する問題の発生源になる可能性を検討する。具体的には、当該地区における「This place」という壁画を検討することから顕在化するラティーノ壁画の矛盾を明らかにする。これにより、ラティーノ壁画を対抗文化としてだけでなく、米国社会との複雑で継続的なパワー関係から考察していく必要性を示唆したい。

Ⅱ 壁画「This place」

ミッション地区において、「存在意義 (placeholder)」⁴⁾としての壁画は商業施設、駐車場、公園などの様々な場所に描かれている。しかし、「This place」という壁画は①ラティーノ文化と商業の中心地である24番通りに位置すること⁵⁾、②ミッション地区の歴史や人物を主題とした壁画であること、③ラティーノ壁画の矛盾が表されていることから、ジェントリフィケーションという文脈において、特筆すべきものであると思われる(写真1)。

「This place」に描かれているのは、ラティーノ・コミュニティを築いた人々である。左から中央にかけては、ミッション地区の教育者たちがいる。



写真1 This place
(出典) 2016年8月、サンフランシスコ市で筆者撮影。

左から壁画制作のNPOであるプレシータ・アイズ (Precita Eyes) の創設者のスーザン・セルバンテス (Susan Cervantes)、教師兼活動家のマーサ・エストレリア (Martha Estrelia)、活動家兼芸術家のマイケル・リオス (Michael Rios)、ミッション教育センター (Mission Education Center) の責任者であるリタ・アルバイア (Rita Alviar) が描かれている。中央には1970年に創設されたスペイン語と英語のバイリンガル新聞であるエル・テコロテ (El Tecolote) の創設者たちがいる。新聞の見出しには「ミッション・コミュニティは高級なコンドミニアム建設の一時停止を求める (Mission community calls for moratorium on luxury condominiums)」とある。その左にはバーナル・ハイツ公園におけるアレハンドロ・ニエト (Alejandro Nieto) の死への抗議が⁶⁾、その右には演劇学校のロコ・ブロコ (Loco Bloco) の人々が描かれている。そして、壁画の一番右に居るのは、詩人で活動家であったアルフォンソ・テキシダー (Alfonso Texidor) である。彼は2014年のクリスマスに亡くなった人物であり、描かれている人々の中で唯一の故人である。彼の左手は「革命が起きたら、よい言葉をあなたに与えよう (When the revolution comes, I'll put in a good word for you)」と書かれた詩が握られている。最後に、壁画の

右角には小さくフィリーズ・コーヒーのオーナーであるフィル・ジャーバー (Phil Jaber) が描かれている。このコーヒー店の壁に「This place」は描かれている。

「This place」の制作資金は、カリフォルニア芸術評議会 (The California Arts Council) のクリエイティブ・カリフォルニア・コミュニティ (The Creative California Communities) というプログラムから獲得したものである。獲得した資金をもとにプレシータ・アイズで開始されたのが「敬意の壁プログラム (Walls of Respect Program)」である。ここで注目したいのは、「敬意の壁 (Walls of Respect)」という名前である。この名は 1967 年のシカゴで黒人文化団体 (The Organization of Black American Culture) が描いた壁画のタイトルに由来する。黒人芸術家とブロンズビル・コミュニティ (黒人音楽が繁栄した黒人地区) のメンバーが何度も議論をかわし、歴史上重要と考えられた 51 人の黒人が描かれた壁画が「敬意の壁」である (Alkalimat, Crawford and Zorach 2017: 4-5)。コミュニティの内部から選択された重要な人物を描くというこのアイデアは、約 50 年後のサンフランシスコ市のラティーノによって継承される。それが、プレシータ・アイズによる「敬意の壁プログラム」であった。

「This place」の制作責任者で芸術家のフレッド・アルバラード (Fred Alvarado) は「敬意の壁」から受けたインスピレーションを次のように話している。

敬意の壁は 50 年前の黒人コミュニティにとって、コミュニティの内部から何か肯定的なものを見つけて、そして何か肯定的なものを生み出す手段だったんだ。俺たちはミッション地区の壁画よりも黒人コミュニティの壁画に敬意を払いたかったね⁷⁾。

アルバラードの指摘にもあるように、「敬意の壁」は黒人コミュニティの内部から発せられる「肯定的な」黒人らしさの表現が特徴である。自己を語る

ことを否定されてきた黒人による公民権運動が高揚をみせた 1960 年代、「肯定的な」黒人像を描くという手法は、約 50 年後の米国社会で同じような経験をもつラティーノ芸術家の目に重要な表現手法として映ったのであろう⁸⁾。

そして、「敬意の壁プログラム」を実施するにあたり、アルバラードは描かれる人々の選択について、以下のように述べた。

俺はマーティン・ルーサー・キングのような国民的英雄を描く場所もあるべきだと思う。ただ俺が「敬意の壁プログラム」で描きたかったのは、コミュニティ内部にいる身近なヒーローとアイコンだった⁹⁾。

では一体、なぜアルバラードはミッション地区のヒーローに敬意を表したかったのだろうか。ミッション地区のジェントリフィケーションという社会的文脈を提示しながら、アルバラードはその理由を次のように語った。

コミュニティがまだそこに存在するからこそ、俺はコミュニティで働いている人たち、コミュニティのために立ち上がる人たちに注目したかった。彼らに敬意を表して、まだ彼らはそこにいることを示したかった。ジェントリフィケーションがあって、大きな変化が起きたけど、彼らはまだそこにいるだろ？ 彼らとその組織がミッション地区を特別な場所にしたんだ。それこそ、俺が表現したかったものなんだ¹⁰⁾。

アルバラードによる語りは、断片的ながら、ミッション地区の変容に対するラティーノとしての一つの経験を伝えている。彼のエピソードからは、ミッション地区から転置 (displacement) されるラティーノとしての虚無感と、住宅市場の高騰に伴う将来的なラティーノ文化と歴史の喪失という恐怖心をうかがい知ることができる。

あわせて、アルバラードのエピソードにはこの変容に対抗するラティーノとしての意志が表れている。ミッション地区の繁栄に寄与したヒーローに対

する感謝の表明は同時に、「ラティーノはまだそこにいる」という主張と表裏一体であろう。彼が述べるように、「This place」という壁画制作の根底には、「誰がミッション地区を特別な場所にしたのか」を示す意図がある。アルバラードにとって、その回答はラティーノと彼らの組織であった。つまり、ミッション地区とラティーノの親密な関係を表現した作品が「This place」なのであろう。

以上のような想いを込めて、「This place」を制作した芸術家のアルバラードにとって、壁画とは何を意味するのか。この質問に対して、芸術家だからこそ抱える苦悩をアルバラードは語った。

俺にとって、壁画は諸刃の剣みたいなもの（like double-edged sword）なんだ。ミッション地区には壁画がずっとあるだろ？ でもジェントリフィケーションはまだ起こり続けてるんだよ。つまり、きれいな壁画があるからこそ、人々はミッションに住みたがる。壁画が人々を連れてくるんだ。だから、芸術家や壁画は人々をミッションに引き寄せる要因になってしまうんだ¹¹⁾。

このように、アルバラードは壁画の矛盾した側面を強調している。「壁画はコミュニティをエンパワーする芸術であり、コミュニティの存在意義である」といった壁画の対抗文化的側面が強調されることはなかった。

Ⅲ 「諸刃の剣」としてのラティーノ壁画

では一体、アルバラードが提示した壁画の矛盾をどう理解できるだろうか。アルバラードが提示した矛盾とは、「芸術家や壁画は人々をミッションに引き寄せる要因になってしまう」というものである。実のところ、このような主張は他の調査においても提示されている（Sprague 2012）。スプレーグの調査では、ミッション地区の芸術それ自体がジェントリフィケーションを促進させる逆説的な効果がある、というラティーノ芸術家の発言が記録され

ている。

加えて、現地調査では、他のラティーノ芸術家から類似した発言がみられた。例えば、ミッション地区の歴史を主題とした壁画を制作するカルロス・ゴンザレス (Carlos Gonzalez) というラティーノ芸術家は、ミッション地区のラティーノ文化が新たな住民を引き寄せるという主張をしている。ゴンザレスはミッション地区で壁画を制作する中で、ジェントリファ어의存在を以下のように感じ取ったという。

俺が壁画をつくっているとき、多くの IT 技術者たちがミッションに移り住んできたよ。彼らはラティーノ文化が好きだからミッションに来るんだが、ラティーノという人々は好きではないんだ。IT 技術者たちはミッションの活力や色、雰囲気、匂い、そして料理は好きだが、必ずしもラティーノという人々のことが好きではないんだ¹²⁾。

このように、ゴンザレスは壁画や中南米レストランなどのミッション地区に根付くラティーノ文化が、新たな住民を引き寄せる要因になることを主張している。また、多くの論者が指摘するように、サンフランシスコ・ベイエリアの IT 関連企業に勤める IT 技術者が、ミッション地区に移り住んだことをゴンザレスは示唆している (Alejandrino 2000: 14-15; Casique 2013: 1-26; CCI 2015: 24-28; CJC 2015: 20-25)。

では、壁画に代表されるラティーノ文化は、ミッション地区に新たな住民を引き寄せたのだろうか。ミッション地区のジェントリフィケーションの要因を調査したアレハンドリノ (Alejandrino 2000: 19-20) は、文化的アイデンティティが新たな住民を引き寄せる要因となっていたと指摘している。アレハンドリノが主張する文化的アイデンティティとは、ミッション地区のラティーノ文化や芸術家の強い存在感などの要素が組み合わさったものを指す。アレハンドリノによれば、この文化的アイデンティティはミッション地区を魅力的にする要因の一つになっていた¹³⁾。

実際に、元サンフランシスコ市議会議員のデヴィット・キャンボス (David Campos) はラティーノ文化の魅力に引き寄せられてきた新たな住民の存在を、ニューヨーク・タイムズ紙に語っている。キャンボスはミッション地区に移り住んでくる人々の「壁画が大好きだ」という証言を挙げながら、そのような人々がミッション地区を消滅させていることを述べている (Pogash 2015)。コルドバ (Cordova 2017: 242) が指摘するように、芸術家の仕事はミッション地区の資産価値を高める要因の一つになってきたが、そのような仕事をした芸術家が転置されるという状況が存在するのであろう。

では、新たにミッション地区に流入してきた人々は、どのような人々なのだろうか。また、ミッション地区でジェントリフィケーションが生じた1990年代後半以降、どのような変化があったのであろうか。

まず、2013年のサンフランシスコ市の人口は約81万人であり、ミッション地区はそのうちの約5万人を抱えている。1980年から2000年にかけてミッション地区の人口は19%増加するものの、2000年から2013年にかけてその人口は減少している。一方で、サンフランシスコ市全体の人口は過去30年間増加を続けている (表1)。

2000年から2013年にかけてのミッション地区の人口減少は、ラティーノ人口の減少と一致している。2000年ミッション地区全体の50%を構成したラティーノ人口は、2013年までに38%に減少した。カリフォルニア大学バークレー校の調査によれば、ラティーノの多くは低・中所得者であった (CCI 2015: 29)。低・中所得者が多かったため、地価の上昇で退去せざるを

表1 サンフランシスコ市とミッション地区の人口の変化

年/場所	サンフランシスコ市全体	ミッション地区
1980年	677,678	45,788
1990年	723,959	51,640
2000年	776,733	54,428
2013年	817,501	51,578
1980年から2013年までの変化率	21%	13%

(出典) CCI (2015: 25) をもとに、筆者作成。

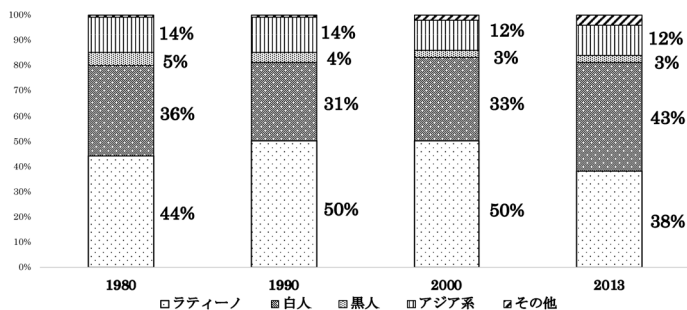


図1 ミッション地区における人種およびエスニック・グループ別の人口の変化 (出典) CCI (2015: 26) をもとに、筆者作成。

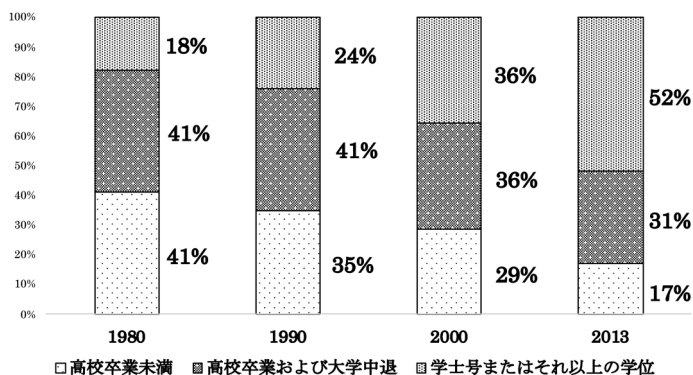


図2 ミッション地区における教育達成度の変化 (出典) CCI (2015: 26) をもとに、筆者作成。

得なかったと思われる¹⁴⁾。その一方で、白人の人口は2000年の33%から2013年の43%と増加している。白人が増加した時期は、ジェントリフィケーションが生じた時期と一致している(図1)。

白人の流入に伴い、大きな変化をみせたのは教育達成度と平均所得である。ミッション地区に居住する25歳以上の者で学士号またはそれ以上の学位を保持する割合は、2000年の36%から2013年の52%と急増している。一方で、高校卒業未満の割合は2000年29%から2013年17%と減少している(図2)。そして、ミッション地区における平均所得は1980年の41,739ド

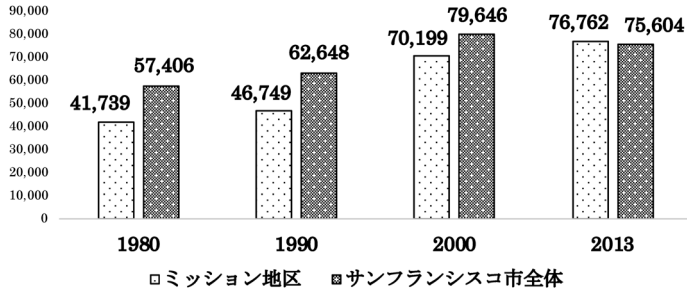


図3 ミッション地区とサンフランシスコ市全体の平均所得の変化
(出典) CCI (2015: 27) をもとに、筆者作成 (金額は米ドル)。

ルから2013年の76,762ドルと増加している。これはサンフランシスコ市全体の増加率を抜くスピードである(図3)。上述したように、流入した白人の多くはIT関連企業に勤めるIT技術者であった。IT技術者の多くは高学歴の富裕層であったと指摘されており(CCI 2015: 25-27)、彼らがミッション地区の教育達成度と平均所得に大きな影響を与えていたと考えるのが妥当であろう。

このようにみると、ミッション地区では「人種的・階級的な再構成」(CJJC 2015: 8)が起きていることがわかる。この再構成の要因をラティーノ壁画のみに求めるべきではないだろう。なぜならば、ジェントリフィケーションの要因と過程は、国家レベルや地域レベルでの社会経済的な変化を考察する必要があるためである¹⁵⁾。しかし、上述してきた理由から、壁画に代表されるラティーノ文化の存在は、ミッション地区に新たな住民を引き寄せる要因の一つであったと考えられる。事実、上述の人口動態調査でも、ミッション地区におけるラティーノ文化の豊かさが要因の一つとして挙げられている(CCI 2015: 25)。

すると、ジェントリフィケーションに対抗するためのラティーノ壁画は描かれるものの、ミッション地区が直面する問題の有効な解決方法になっていると短絡的に回答することはできない。管見の限り、2001年にジェントリフィケーションに対抗する目的で壁画が初めて描かれている¹⁶⁾。この壁画

が制作された2001年以降も、ミッション地区における白人の流入が止まっていないことは、上述の調査から明らかである。さらにいえば、ラティーノ壁画の芸術的な魅力に引き寄せられて新たな白人住民がミッション地区に移り住む場合、ラティーノ壁画は問題の有効な解決方法ではなく、むしろ問題を作り出す発生源となってしまう。その場合、ラティーノ壁画を対抗文化的側面だけでなく、米国社会との複雑で継続的なパワー関係から考慮する必要があるのではないだろうか。

IV おわりに

最後に注意すべきは、ラティーノ壁画を対抗文化か問題の発生源かと二者択一的に捉える必要はないことであろう。一方で、ラティーノ壁画を対抗文化としてのみ賞賛することは、米国社会とのパワー関係を無視することに繋がりがねない。他方で、ラティーノ壁画を白人住民の流入を促進する問題の発生源としてのみ捉えることは、壁画を描くラティーノの主体性をあまりに受動的に描くことになってしまう。それは壁画制作が問題を作り出すにも関わらず、そのような実践をラティーノ自身がおこない、そのような実践によってラティーノを取り巻く状況が悪化することを描くためである。つまり、この場合、米国社会によって操作されたものとしてラティーノの主体性を記述することになってしまう。

そのため、重要なのはラティーノ壁画が置かれた状況を継続的な過程として認識することであろう。つまり、米国社会との継続的な緊張関係からそのあり方が重層的に決定されるものとして、ラティーノ壁画を取り巻く複雑さに向き合うことが重要となる。このように認識することで初めて、「問題の発生源となるならば、なにがその現状を規定するのか」「文化実践による抵抗が可能であれば、どのような局面で達成されるのか」と問うことが可能になる (Hall 2019: 347-361)。この問いに回答することは本稿の目的をこえているが、本稿で示してきたように、ラティーノ壁画が問題を作り出す発生源になる状況は存在する。

* 本稿の執筆にあたっては、太田好信先生（九州大学名誉教授）や慶田勝彦先生（熊本大学教授）のご指導を賜った。また、現地調査においては、フレッド・アルバラード氏やダニエル・ガルバス氏といったミッション地区のラティーノ芸術家のご支援をうけた。この場を借りて心より、感謝申し上げる。

註

- 1) ラティーノとは中南米諸国にルーツをもち、米国に居住する人々を指す。ラティーノの中には自己のルーツを明確にするために、「ラティーノ」ではなく、「チカーノ（Chicana/os）」という用語を使用する者がいる。この用語はメキシコ系米国人を指し、文化的・政治的意味を色濃く帯びた用語である（村田 2007: 152-153）。本稿において、「ラティーノ」とは、中南米諸国にルーツをもつ人々というより大きな集団の枠組みを指す。そして、一般的に「チカーノ壁画（Chicano murals）」と呼ばれる芸術を、多様なルーツをもつ人々を包括するために「ラティーノ壁画（Latino murals）」とする。
- 2) チカーノ運動とはメキシコ系米国人を中心とした政治闘争であり、彼らの社会経済的権利を獲得する上で鍵となった運動である（黒田 2000: 53-80）。
- 3) サンフランシスコ・ベイエリア（San Francisco Bay Area）では、1990年代後半からIT関連企業の急激な発展がおきた。このような急激な発展が直接的原因になり、サンフランシスコ市では住宅市場が高騰した。その結果、ミッション地区では低・中所得者であるラティーノの人口が減少した。その一方で、IT関連企業に勤める白人富裕層の人口が増加した（Alejandrino 2000: 14-15; Casique 2013: 1-26; CCI 2015: 24-28; CJC 2015: 20-25）。そのため、ミッション地区のジェントリフィケーションでは、人種の側面が強調された定義がされている（Alejandrino 2009: 9; CJC 2015: 8）。
- 4) ミッション地区 24 番通りに描かれたあるラティーノ壁画が無断で塗りつぶされた際に、ラティーノ活動家が述べた言葉である（Waxmann 2017）。壁画が対抗文化として採用されてきたミッション地区の歴史を考慮すれば、この芸術に「存在意義」という意味づけが与えられていることは不思議ではないのかもしれない。
- 5) 24 番通りに並ぶ家族経営のローカルビジネスの存在は、コミュニティにとって重要であったことが指摘されている（Godfrey 1988: 155）。また、シンコ・デ・マヨ・パレード（The Cinco de Mayo parade）やカルナバル（Carnaval）といった文化イベントも 24 番通りを中心に実施される。そのため、インタビューを実施したラティーノ芸術家が「ミッション地区のアイデンティティ」として 24 番通りに描かれる壁画の重要性を指摘したことは不思議では

- ない(2016年10月20日、サンフランシスコ市で、筆者がダニエル・ガルベス(Daniel Galvez)に聞き取り)。
- 6) 警察の銃撃によって、20代のラティーノ男性が死亡した事件である。ジェントリファーがニエトをギャングと思い込んだことで、警察に通報したことから発生した事件である。
 - 7) 2017年1月9日、オークランド市で、筆者がフレッド・アルバラードに聞き取り。
 - 8) 黒人研究の領域から、公民権運動がラティーノの民族的アイデンティティの高揚に与えた影響が指摘されている(Rollins 1986: 66-67)。
 - 9) 2017年1月9日、オークランド市で、筆者がフレッド・アルバラードに聞き取り。
 - 10) 同上。
 - 11) 同上。
 - 12) 2017年1月5日、サンフランシスコ市で、筆者がカルロス・ゴンザレスに聞き取り。
 - 13) 他の要因として、ミッション地区の地理的な要因が挙げられている。ミッション地区にはベイエリア高速鉄道(Bay Area Rapid Transit)の16番通り駅と24番通り駅があり、ダウンタウンまでのアクセスが良い。また、ミッション地区の東にある国道101号線はシリコンバレーまでつながっており、IT関連企業に勤める者にとって利便性が高かった(Alejandrino 2000: 19-20)。
 - 14) 事実、ワン・ベッドルームのアパート(one-bedroom apartments)の平均賃料は上昇を続けている。1994年にひと月800ドルであった平均賃料は、2013年までに2,850ドルとなっている(CCI 2015: 29)。
 - 15) 例えば、製造業を主軸とした米国経済の構造転換や、サンフランシスコ市における開発の歴史などが指摘されている(CJJC 2015: 20-22)。
 - 16) 壁画のタイトルは「Victorion: Defensor de la Mission/Victorion: Defender of the Mission」で、制作者はサイロン・ノリス(Sirron Norris)である。ジェントリフィケーションに対抗し、ミッション地区のラティーノビジネスを持続させるために描いた、と制作者本人が語った記録がある(Sprague 2012)。

参考文献

- 牛島万. 2001. 「チカノアートの歴史: 対抗文化からの脱構築」(『国際文化研究所紀要』7号, 10月), pp. 15-37.
- 加藤薫. 1993. 「チカーノ・アートの現在」(『国際経営論集』4号, 1月), pp. 153-188.

- . 2002. 『21世紀のアメリカ美術 チカーノ・アート—抹消された“魂”の復活』 明石書店.
- 黒田悦子. 2000. 『メキシコ系アメリカ人—越境した生活者』 国立民族学博物館.
- スミス, ニール. 2014. 『ジェントリフィケーションと報復都市』 原口剛訳, ミネルヴァ書房. 原著 Neil Smith, *The New Urban Frontier: Gentrification and the Revanchist City* (London: Routledge, 1996).
- 多木浩二. 1989. 『それぞれのユートピア 危機の時代と芸術』 青土社.
- 藤塚吉浩. 2017. 『ジェントリフィケーション』 古今書院.
- 村田勝幸. 2007. 『“アメリカ人”の境界とラティーノ・エスニシティー「非合法移民問題」の社会文化史』 東京大学出版会.
- Alejandrino, Simon Velasquez. 2000. *Gentrification in San Francisco's Mission District: Indicators and Policy Recommendations* (San Francisco: Mission Economic Development Association).
- Alkalimat, Abdul., and Romi Crawford, Rebecca Zorach. 2017. *The Wall of Respect: Public Art and Black Liberation in 1960s Chicago* (Evanston: Northwestern University Press).
- Casique, Francisco Diaz. 2013. "Race, Space and Contestation: Gentrification in San Francisco's Latina/o Mission District, 1998–2002." Ph.D. dissertation, the University California, Berkeley.
- CCI (Center for Community Innovation). 2015. *Case Studies on Gentrification and Displacement in the San Francisco Bay Area*. https://www.urbandisplacement.org/sites/default/files/images/case_studies_on_gentrification_and_displacement_full_report.pdf (accessed 2020.10.1).
- CJJC (Causa Justa : Just Cause). 2015. *Development without Displacement: RESISTING GENTRIFICATION IN THE BAY AREA*. https://ncg.org/sites/default/files/resources/DevelopmentWithoutDisplacement_CausaJustaJustCause_0.pdf (accessed 2020.10.1).
- Cockcroft, Eva Sperling, and Holly Barnet-Sanchez. 1993. *Signs from the Heart: California Chicano Murals* (Albuquerque: University of New Mexico Press).
- Cordova, Cary. 2017. *The Heart of the Mission: Latino Art and Politics in San Francisco* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press).
- Godfrey, Brian J. 1988. *Neighborhoods in Transition: The Making of San Francisco's Ethnic and Nonconformist Communities* (Berkeley: University of California Press).
- Hall, Stuart. 2019. *Essential Essays: Foundations of Cultural Studies* (Durham: Duke University Press).

- Jackson, Carlos Francisco. 2009. *Chicana and Chicano Art: Protestarte* (Tucson: University of Arizona Press).
- Jacoby, Annice. 2009. *Street Art San Francisco: Mission muralismo* (New York: Abrams).
- Rodriguez, Patricia. 2011. "Mujeres Muralistas," in Chris Carlsson and Lisa Ruth Elliott (eds.), *Ten Years That Shook the City: San Francisco 1968–1978* (San Francisco: City Lights Foundation Books), pp. 81–91.
- Pogash, Carol. 2015. "Gentrification Spreads an Upheaval in San Francisco's Mission District," *The New York Times*, May 22. <https://www.nytimes.com/2015/05/23/us/high-rents-elbow-latinos-from-san-franciscos-mission-district.html> (accessed 2021.2.19).
- Rollins, Judith. 1986. "Part of a Whole: The Interdependence of the Civil Rights Movement and Other Social Movements," *Phylon*, 47(1), 1st Quarter, pp. 61–70.
- Sprague, Alyson. 2012. "MISSION MURALISMO: EXAMINING IDENTITY IN SAN FRANCISCO'S MISSION DISTRICT VIA AN EXPLORATION OF PUBLIC MURAL ART." Capstone paper, Stanford University.
- Waxmann, Laura. 2017. "Mission's culture not for sale, but it can be painted over," *Mission Local*, June 2. <https://missionlocal.org/2017/06/missions-culture-not-for-sale-but-it-can-be-painted-over/> (accessed 2020.10.1).

〈Summary〉

Latino Murals as Countercultural Art and its Contradiction: A Study in the Gentrification of San Francisco's Mission District

Chikara IJIMA

The aim of this paper is to examine the contradiction of the Latino murals that have occurred in the gentrification of San Francisco's Mission District. The contradiction is that Latino murals which have served as a countercultural art against the gentrification of the Mission District could, at the same time, be a cause of this process.

Murals created by Latina/os in the United States have largely been studied by Chicano studies. The literature on Latino murals focuses on the period when the Chicano movement flourished, from the late 1960s to 1970s, and clarifies the role played by murals in the gaining momentum of the movement. On the whole, it has shed light on Latino murals as a countercultural art that, through the process of self-determination, represents the Latinos' own history and culture.

This consideration regarding Latino murals can be perceived in the Mission District, San Francisco, where gentrification is tangible. Following Simon Velasquez Alejandrino who studies the case of the Mission's gentrification in particular, this paper defines the phenomenon as follows: the process

by which poor and working-class residents are displaced by rising costs and other forces related to an influx of new, wealthier, and often white residents. As the Latinos in the Mission experience more displacement, it would probably not be surprising to see the recent murals in this area depicting the local history and culture to challenge the gentrification trend.

However, precisely because of the attractiveness of Latino murals created against the gentrification, they help foster an influx of new residents who are attracted to them, especially wealthy white residents. Thus, there is a non-negligible contradiction here that the Latino murals against the gentrification of the Mission District could also be a cause of the problem, as they attract new residents.

In order to examine such a contradiction of the Latino murals in the Mission District, this paper adopts interview research, especially with Latino artists, as a primary methodology. All of the interviews with the Latino artists in the Mission District were conducted from August, 2016 to January, 2017.

Consequently, it became clear that Latino murals cannot be simply celebrated as a supposedly countercultural art, considering the narratives of the Latino artists. What is revealed through the interviews is that precisely because of the murals, there would be an increased influx of new residents, and the artists are in a quandary with the fact. According to the study done by Alejandrino, the Mission District boasts a unique cultural identity. This cultural identity, consisting of the combination of Latino culture and a strong artist presence, makes the Mission District attractive, especially to wealthy white residents. Following the line of approach suggested by Alejandrino, CCI (Center for Community Innovation) points out that new residents were -and are still- attracted by the cultural richness of the neighborhood. Taking what the Latino artists expressed and the literature suggested,

it could be possible to address Latino murals as having been manipulated by the dominant society. A further study of Latino murals should be conducted in considering this contradiction at the very least.

Following Stuart Hall, this paper concludes that it is not necessary to subscribe Latino murals to either perspective. Rather, it is important to look at the process which defines Latino murals in a continuous and uneven power relationship with the dominant society.